かぐらおか

第 72 号

平成４年５月15日

編集　旭川医科大学
　　厚生補導委員会
発行　旭川医科大学教務部学生課

（題字は初代学長　山田守英氏）

（写真撮影　歯科口腔外科　島崎　善徳）　　ヤ　マ　セ　ミ

第20回入学式式辞……学　　長… 2
新入生記念写真…… 3
平成４年度入学者名簿…… 3
危機としての入学初期……岩渕　次郎… 4
学生生活の過ごし方……坪井　潤 …… 5
新歓を終えて……馬場　一徳… 5
日本文化と心の構造……酒木　　保… 6
医師国家試験と交通事故……東　　匡伸… 7
平成４年度の主な行事…… 7
平成４年度運営組織…… 7
研究室紹介……眼科学講座… 8
研究室紹介……哲　　学… 8
平成４年度入学式…… 9
平成４年度大学院入学者名簿…… 9
平成３年度学士学位記授与式…… 9
平成３年度学位記受領者名簿…… 9
第１回新入生研修実施される……10
医大祭開催について……10
課外活動短信……10
土曜日の業務について……11
地区体について……11
訃　報……11
教官の異動……11
学生の定期健康診断実施について……12
窓　外……三代川斉之…12

第20回入学式式辞

学長　清　水　哲　也

皆さん、入学おめでとう。

若々しい新入生の皆さんとともに本学のキャンパスにも本格的な春が訪れてきた観があります。

希望にあふれる皆さん一人一人の生き生きとした表情を見るにつけ、「入試」という難関に挑戦し、見事、栄冠をかちとった諸君に、私ども教職員一同は、心から祝福を贈ります。

皆さんは、「入試」という目標に立ち向って、戦いを挑み、そして自らの手で勝利をかちとったのです。

「初心忘れるべからず」という言葉を誰もが知っているにもかかわらず、ともすれば、この言葉ほどないがしろにされるものはありません。

これからの6年間、諸君は敢然として、あらゆる事態に挑み、そして時には血みどろになってさえ戦うスピリットをいつまでも持ち続けてほしいと思います。

しかしそれは堂々たる競争原理にもとずくチャレンジでなければなりません。勇者とはフェアな戦いをかちとった若者にのみ与えられる賛美の辞なのです。

そのためには幅広い教養を身につけ、豊かな人間性、自主的な判断力を常に養い、より高度な社会性を学習する必要があります。

診断や治療といった技術的な面を学ぶ前に、今、「社会」が諸君達に求める「期待される医師像」というものが、如何なるものであるかを、今日という日に是非とも真剣に考えてほしいのです。

まず、今日という日から始まって、生涯を通して学習し、未知の課題を解決する積極性を是非、身につけてほしいのです。また、ただ単に専門分野のみにとどまらずに、全般にわたる広い視野と高い見識とを保持してほしいと思います。

また人間性あふれる豊かな感性と病める人、社会的弱者への限りない暖かさに満ち満ちた医学生であってほしいのです。

さらには生命倫理に対する深い畏敬の念を片時も忘れず、常に病める人の立場に立つこと、つまり人の痛みを我が痛みととらえる医療を行えるよう医学およびその周辺領域の知識と深い教養を是非、学びとってほしい。

健康の保持、クリーンな地球環境を保つ努力、つまるところは「環境医学」、「予防医学」にも充分な知識と責任を持ちうる自覚を身につけて頂きたい。

これからの医師は、既に病を得た人達をいやす努力と同じように「環境医学」にも卓越した対処能力を学習する必要があります。一例を挙げれば皮膚癌の診断、治療と同時に、オゾン層の破壊をこれ以上、進行させないことが、皮膚癌患者の発生防止に役立つことを学んで頂きたい。

覚醒剤中毒の患者を施設に収容し、治療する際には、これらの中毒患者が蔓延する社会環境に対しても誰よりも積極果敢に挑戦する医師を目指してほしい。

このように今や、医学は、医療は刻々に移り変る社会事象から隔絶された「医療施設」のなかにのみ孤立して存在するものではないのです。

したがって6年間という限られた期間に幅広い教養と医学の専門的学習を両立させるためには、必らずしも一般教育、専門課程という型式的な区分にとらわれることなく、全体を一貫した観点から考える必要があります。

それ故に、旭川医科大学ではその教育効果を期待して、開学当初より6年一貫教育という思想に立脚したカリキュラムを設定しております。

一般教育は共通基礎科目、専門への基礎科目、医学との学際的学科目、医学以外の「学科目の概論」の4分野に配置されていますが、本学で実施されている、いわゆる「統合医学型」の利点は、多岐に亙っております。とくに医学教育の効率をたかめると同時に学習のモチベーションを高かめる利点があります。

それにもかかわらず、数学や物理・化学といった学科目の試験などで難かしい課題に遭遇すると「医学の履習を目的に入学したのに何故これらの学科目を学ぶ必要があるのだろうか」という声に接することがあります。しかし、これらの専門課程に入る前の基礎科目のミニマムエッセンシャルを理解しない学生は将来「専門課程」の履習に際して大きな困難に直面することになります。

専門への基礎科目を充分に身につけていない学生は、たとえば現在、診療の第一線で汎用されている超音波診断装置の原理、つまり何故、超音波という「音」によって生体の内部構造を画像として描出できるのかといった原理を終生、理解することが難しいことになります。

おわりに、いわゆる「部活」などの課外活動にも積極的に参加して、強靭な肉体と強い意志力の涵養にも努めて下さい。「部活」によって結ばれた学生時代の交友関係ほど素晴らしいものはありません。本学のキャンパスを取りまく雄大な自然が必らずやこれらの課外活動を支えてくれることでしょう。

希望に満ち溢れた諸君の前途に再度、祝福を送って式辞と致します。

平成４年度 旭川医科大学入学式

危機としての入学初期

心理学教授　岩　渕　次　郎
（第１学年担当）

新入生諸君、入学おめでとう。“新しい時代に即応した医学教育”を担って創成の歴史を重ねてきた本学は、たゆまざる生生発展のなかでことしは開学20年目を迎えます。この意義ある節目に入学を果された諸君は、その幸先き良い門出に相応しい、栄えある修学の道をめざして、まずは意を新たにして下さい。

ところで、この歓びに沸く入学の第一歩は、また青年期の諸君にとって、さまざまな人生的発達課題の克服を迫られるクライシス（青年期危機）の起点ともなっています。諸君の直面する課題には、これまでの快適な家庭への依存を脱して、この地に自律的な生活の根を張ることや、ライフ・ワークの目標に“医学”を選びとった意義と価値を、改めて自らに問い直すなどがあります。更にまた、他者との間に親密で相互啓発的な関係を築いたり、自分なりの人生観・世界観を育んでいくなどもこれに入ります。

諸君のこののちの大学生活で、最大の目標が学問の修得にあることは今さら言うまでもありません。しかしまた同時に諸君は、この中でさきの課題と向い合いながら人間的成長をも果していかなければなりません。とりわけ入学初期での課題との取組み方が、のちの本格的な学業への適応の成否さえ左右するという点で、この作業は学業にも劣らずないがしろにはできません。

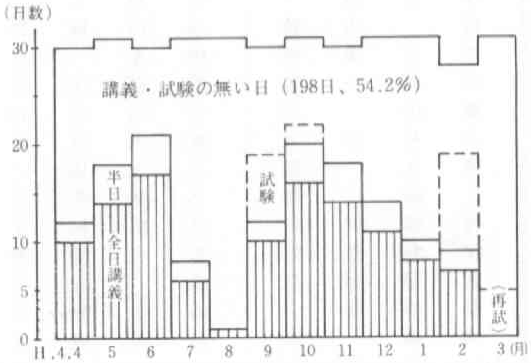
課題はいずれも学生諸君にとって至極当然なものばかりですが、時に家族の過剰な庇護の下で主体性を持てぬまま、周りの要請に応えて入学したり、進路選択を偏差値だけに頼って受験戦線を駆けぬけてきた一部諸君には、これらの課題はかなり苦痛なものになってきます。他に悪い条件が揃うと、生活環境の激変に耐えきれず、入学早々にして大学生活から脱落してしまったり、或いは何年経っても本学の特色や目標になじめずに、無気力に陥ったりしかねません。これらの諸君に共通しているのは、本学（というより一般に“大学”という高度の専門的目的集団）に学ばねばならない内発的動機に欠けていることです（動機はあっても、周りからの期待とか受験戦略の外在的なものです）。

しかしこのことは彼らに限ったことでなく、程度の差こそあれ曖昧な動機の諸君は少なくありません。入学に当って皆さんは、改めて自分は本学で何をしたいのか、何ができるのか、何を求められているのかについて“自己点検”をして下さい。この点検を通して、“私とは一体何者か”の問いに自ら答を出していくことこそ、エリクソンのいう“自我同一性”の獲得の過程であり、またさきの青年期の課題もすべてここに繋がってきます。

自己との真剣な対決は、長く続いてしばしば痛みも伴うものです。しかし、これを避けていてはいつまでも同一性の混乱・拡散に喘ぐことになります。また６年間に及ぶ勉学の道は、必ずしも平坦ではありません。むしろこれらの課題に誠実に答えていくことによって、時に辛く困難な学業も、まさに学ぶ者の“生きる手応え”として受けとめることができるというものです。

諸君のそれぞれが等しく同一性を問われるこの時期に、何より心の支えになるのは多くの仲間たちとの出会いと交流です。人はみな自分と同様に、独自の生き方や考え方を持っていますから、それらに積極的に触れ合うことは、お互いの理解を深めるだけでなく、各人の自己探究と自己啓発を一層促す契機となります。ことしの入学集団は、道外出身者がほぼ半数に増え、帰国子女も加わり、年長者が多い（すでに自分の専門領域で社会的貢献を果してきた諸君もいます）など、例年よりもバラエティに富んでいます。どうかこの幸運を存分に活用して下さい。また、興味の持てる課外活動に積極的に参加して、先輩たちと何かを成し遂げるという体験も、仲間同士の連帯を一段と強めるのに役立つでしょう。

いま諸君は、危機ならばこそ学業と共に、仲間との語らいや、悩みや、遊びが必要なのです。幸いにも諸君には、これらを補ってなお余りある自由時間があります。あとはこの時間をどこまで生かせるかによって、この１年の明暗が分れることだけは銘記して下さい（下図参照）。



学生生活の過ごし方

第6学年　坪井　潤一

新入生の皆さん入学おめでとうございます。受験勉強が長く感じた人も短く感じた人も一様にほっと一息ついていることでしょう。また、自炊や下宿生活を始めた人はようやくその生活に慣れてきたことと思います。私は、自分や私の友人の経験をもとに学生生活の過ごし方について述べようと思います。

既に皆さんも上級生の人達と同様に大学での授業が始まり、その中のかなりの人達が入学以前に描いていた医学部のイメージと異なる日々に困惑し、医学に対する情熱の発散場所に困っていると思います。カリキュラム上仕方のないこととは思いますが、やる気に満ちた皆さんにとっては、少々辛い日々であることでしょう。しかし、視点を変えれば、皆さんには上級生と異なり、多くの自由な時間といろいろな物事に触れられる機会があるといえるのです。学年が上がるにつれて、実習や試験勉強でかなりの時間を取られ、自分の時間は次第に持てなくなりますから、皆さんには今しかできないことをして欲しいのです。クラブ活動に精を出すのも良いでしょうし、休みの期間を利用して旅行に出かけるのも良いでしょう。アルバイトに精を出し、医科大学の外の世界を知ることも良いと思います。実際に、私が6年生になり臨床実習の中で感じていることの一つに、医学部の学生というものは、ともするとお山の大将になりがちなことがあります。皆さんもお分かりだとは思いますが、大学で授業を受け、勉強だけをしてきたのでは、対人関係の重要性、いろいろな職種に対しての知識、相手を思いやる気持ちなどを学ぶことはできないと思います。だからこそ、ゆとりある今の時期に広い視野を持てるように学生生活を過ごして欲しいのです。教養の授業もそのように考えれば、また違った発見や勉強意欲もでると思います。なるべく、やらされているよりも自らが求めて行うようにしてください。皆さんの中には早く医学の一端でも垣間見たいという人が居るかもしれません。そのような人は、自分で各講座の扉を叩いてみてください。先生方は、快く受け入れてくださるでしょう。私の友人で病理学講座で勉強している人も居ますし、外科学講座で実験をしている人も居ます。私自身、細菌学講座で実験をさせて戴きましたし、寄生虫学講座では公私ともに今でもお世話になっています。

最後に勉強についてですが、やらなければならない時にきちんと行っていれば全く問題ありません。つまりメリハリをつけて勉強することが肝心なのです。どうかそれだけは忘れないでください。

低学年の時は長く感じられる毎日が、今振り返ると如何に月日の経つのが早いかを痛感させられております。皆さんも一日一日を大切にして学生生活を満喫してください。

新歓を終えて

新入生歓迎実行委員長　馬場　一徳

7講の後ろに写真が張られ、やる気に満ちた顔が講義室にあふれている。そんな新入生を見ていると、自然と嬉しくなってしまうと同時に、新歓の苦い（？）思い出もよみがえってくる。

思い起すと、昨年の雪の降りだした頃、第1回の新歓委員会が開かれた。その時来たのがたった8人だった。正直言って、やっていけるかなという気持ちだった。しかし、みんなの協力で、合宿の時には24人にも増えた。みんな協力的で、とても助かった。とくに、「影の委員長」と言われた5、6人には、自分以上に仕事をしてくれて、自分のミスの後始末までしてもらい、本当に頭の下がる思いである。

新歓の仕事それぞれを振り返ってみよう。まず、受験案内。空港と駅、ホテルのロビーで、受験生にアドバイスしたり、「受験の心得」というパンフレットを配ったりした。駅では寒さとの戦い、空港では暇との戦い（!?）であった。また、受験当日には、受験生にコーヒーや紅茶を配ったりした。委員のH君が、コーヒーの分量を間違えて、とても苦いコーヒーが出来てしまい、受験生に文字通り苦い思い（？）をさせてしまったり、受験生とお話をして、一緒にお茶配りまでしてもらったりしたことが印象に残った。

そして、メインの新歓合宿。学校では、第2外科の葛西助教授を招いて講演会を行ったり、各クラブ紹介などを行った。また、今年は、毎年使わせてもらっていた観音ロイターが諸般の事情で使えず、高砂ニュー温泉を使わせてもらった。クラブの勧誘にきた上級生が多すぎて、部屋に入れないなど、いくつかの不備もあったが、自分としては納得のいく合宿だった。当日に、自分が風邪を引いてダウンしてしまい、ボロボロの状態で新入生の前で話をしたのもいい思い出である。

今年の新歓は、前述した通り、5、6人の「影の委員長」がいて、仕事をしてくれた。人数が多かったからできた技とも言えるが（もっとも、委員長が全然仕事をやらないから、みんながその尻拭いをしてくれたと言う説もあるが）、この仕事の細分化のシステムはいいと思う。来年度もこの方式でやってみては？と思う。また、来年は、入試制度が変わるので、また新歓も大変だと思うが、新歓の基本である、「新入生のサポート」ということを忘れずに、頑張ってほしい。

最後に1つ、新入生に「ありがとうございました」といわれたときの良さは、新歓をやってないと分からないよ！

日本文化と心の構造

保健管理センター　酒　木　　保

日本人の大方は、自分自身を他者に向けて示そうとする場合には、個人の持つ資格よりも、所属している集団を前面に出すようである。例えば、私が初めて出会った人に自己紹介をする場合、「旭川医大の酒木です。」と言い、「カウンセラーの酒木です。」とは普通言わない。せいぜい言ったとしても「旭川医大でカウンセラーをしている酒木です。」位であり、必ず自分の所属を表に出して、個人の資格や役割は後ろに付け足す。

そして、自分の所属する学校を「うちの学校」と言い、あいてのそれを、「おたくの学校」あるいはうちの学校と区別するために「よその学校」と言うように表現することがしばしばある。

このように、線をやたらと引きたがるのは日本の文化と関係があるようだ。これらの線引きは特に対人関係において、如実に現れてくるようである。そこでは同じ集団に属する人を内の人とし、他の集団に属する人を外の人として両者を区別する。このようにして引かれた線は外から内に越えるにしても、内から外に越えるにしてもなかなか大変なことである。

ほんの少し線の外から内を覗いて見ようとすると、「これは内輪のことだから」と言って、外からの関与を極度に嫌うことがある。このように外からの関与を極度に嫌う時は、そこで触れられる内容が、ほとんどの場合好ましくないものである。どうやら我々は好ましいと思われる内容のものは外に出し、好ましくない内容のものは、内に仕舞っておこうとするようである。ここから、表向きと裏向きとが生まれてきたようである。

裏と表が対になっていて表現されるのは、日本語の特徴の一つである。裏と言えば表が、表と言えば裏が必ず付いてまわっている。例えば、裏どおりに表どおり、裏書きに表書き、裏地に表地など少し考えてみれば次々浮かんでくるだろう。直接対になっていなくても、必ず対概念として裏と表は結びついている。表をたてるといえば裏はどうなっているのかと勘ぐるだろう。また、表を繕うといえば、裏は破れていることが想定される。すなわち、表は見えるものだから整えなければならないが、裏は見えないものだからこのまま隠しておこうと言うことになるのである。

しかし、我々は裏を見せずに裏を読みとらせたり、裏を見なくても裏を読みとるのが得意である。例え肯定的な言葉であったとしても、ちょっとしたイントネーションで実は否定的であることを読みとったり、逆に読みとらせたりするのに長けている。ここでは裏が表を演出したり、表が裏を演出したりしているのであり、日本文化を背景にもった、人間関係のあり方であろう。

そして、これが実は心と顔の関係であり、裏が心で表が顔である。うら悲しい、うら寂しいのは、いずれも心がかなしいのであり、また寂しいのである。裏が心であることは、古語辞典を引いてみるとそこに詳しい解説がある。

さらに、心の作用である感情の起伏や心の中を、体の一部である臓腑で表すのも日本語特有の表現である。例えば、腹が立つ、臓腑が煮え返る、断腸の思い、などいづれも腹に纏わることである。これらが腹におさまっている場合はよいだろう。腹におさまりきらなくなったとき、胃とか腸に疾患が生じてくるようだ。これを心身症というのである。腹と心との関係がここでは如実に物語られている。

一方、表は面であり、これは顔を表す。面を上げるは顔を上げることであるし、面置くは顔を向けることである。視線恐怖症は顔にまつわる病理であり、これに該当する外国語がないので日本文化との関係の深い対人恐怖症のあり方であると言われている。視線恐怖症には見られる不安と見てしまう不安とがある。いづれも外との関係を意識し過ぎる状態である。これらのことから、心身症と視線恐怖症とは、裏と表の病理であり、いづれも日本文化と強いつながりがあるようである。

このように考えてみると、腹に治め過ぎないこと、周りを過剰に意識し過ぎないことが、上手に適応していくことにつながるようだ。どうやら裏と表を上手に使い分けていくことが、日本人の対人関係を上手に保つこつであるよう思われる。結局のところはその時々の状況に応じて、いつの間にか裏が表になったり、表が裏になったりしていることになり、つまるところ裏も表も互いにつながりが在り、同じフィールドにあるものだといえよう。

しかし、これが一つの方向に頑なに固着しようとすると、そこから対人関係に纏わる様々な無理が出てきてストレスになり、いろんな症状を出すようになるのであろう。大切なのは、この両者を状況に応じて適度に使い分けたり、あるいはうまく統合化する工夫を試みたりする柔軟な在りかたである。おそらくそこから本音と建前が生まれたのであろう。

文献　土居健郎　著　　表と裏　　弘文堂
並木正義　著　心とからだの健康法「学生と健康管理」旭川医科大学保健管理センター発行

医師国家試験と交通事故

副学長　東　匡伸

○君は平成元年に運転免許証を取り、以来、5回のスピード違反と信号無視で免停処分を受けたあげくのはてに、遂に歩行者に橈骨・腓骨骨折の重傷を負わせる人身事故までも起こした。当然ながら、○君には重い罰金刑が課せられた。諸君は、このような○君が、人の命を救う立場にある医師になることをどう思うか？　医師免許証を与えるべきではないという社会の声は、当然のことと思うが如何？

ここ数年、本学の学生諸君による交通事故の件数が増加している。誠に残念なことである。**交通事故など、事件・事故を起こして「罰金以上の刑」を受けた者は、原則として医師国家試験を受験することができない。**事件・事故後、当人に改悛の情が顕著である場合に限り、厚生大臣宛の「申立書」を学長に書いて戴き、この「申立書」を医師国家試験受験願書に添付することによってのみ、受験が可能となる。当然のことながら、改悛の情がないもの、悪質な事件・事故の場合には、学長が「申立書」を書くことはない。この事は、諸君が本学に入学した時、諸君及び父兄の方々に説明済であり、「学生生活のしおり」の34頁にも記載し、十分周知されている筈である。しかし、新入生ばかりでなく、高学年の学生諸君の中にも覚えていない者がいるのに驚かされる。ここに再々度、交通事故等を起こさぬよう厳重なる注意を喚起したい。

勿論、本人が交通規則を守り、十分に注意していても、事故を避けることができない場合もあろう。不幸にして事件・事故を起こした時は、速やかに警察に届け出るとともに、学年担当の先生にも報告しなければならない。罰を恐れ逃げることは、罪を大きくすることであり、社会のより大きな罰を受けることになる。当然、学長に「申立書」を書いてもらえなくなることを銘記され度い。

なお、付言しておくが、本学の駐車場は狭く、特別の事情のある者以外には、自家用車通学を禁止していることも、諸君の入学時に通知済である。父母に甘えねだって（情けない恥かしいことである）自動車を手中にし、不許可の自家用車通学をし、学内通路に不法駐車する不心得者が後を絶たない。残念なことである。大学の規則を守らない諸君は、入学時の“宣誓”を破っているのであり、本学学則の懲戒（第10章）条項によって処分されることもあることを申し述べたい。すべての学内通路での駐車を禁じているのは、第1に、多数の患者を抱える病院、引火性危険物等のある研究棟や実習棟に火災等の災害が発生した時、消防車や救急車が、いずれの通路からも、妨げなく出入りできる様に広く空けておくためであり、第2にキャンパス内での交通事故を未然に防ぐため、第3にキャンパスの美しい環境を保持するためである。

人命を助け、社会の幸福のために貢献する医師となるべき学生諸君の良心に、心から訴えたい。

平成4年度の主な行事

今年度の主な行事は次のとおりです。

4月13日	入学式
4月20日～21日	新入生研修（第1回目）
6月5日～7日	医大祭
7月11日～13日	北海道地区大学体育大会
9月9日	学内体育大会
9月16日	解剖体慰霊式
10月26日～27日 10月29日～30日	新入生研修（第2回目）
11月5日	本学記念日
3月25日	学士学位記授与式

（学生課）

平成4年度運営組織

本学には、医学教育についての調査研究、教育課程の編集、修学指導、授業及び試験の実施、単位の修得及び履修、学籍関係等について審議する機関として教務委員会があります。

また、学生の厚生補導に関する調査研究、学生の課外活動、福利厚生等について審議する機関として厚生補導委員会があります。

両委員会の平成4年度の委員は次のとおりです。

〈教務委員会〉

委員長	東　匡伸	（副学長）
副委員長	内田倖喜	（図書館長）
委員	岩渕次郎	（第1学年担当）
	岡田雅勝	（第2学年担当）
	森　茂美	（第3学年担当）
	安孫子　保	（第4学年担当）
	久保良彦	（第5学年担当）
	牧野　勲	（第6学年担当）
	山内一也・黒島晨汎	
	飯塚　一	

〈厚生補導委員会〉

委員長	東　匡伸	（副学長）
副委員長	原田一典	
委員	松岡悦子	
	平塚寿章	
	小野一幸	
	片桐　一	
	平山博史	
	宮岸　勉	
	天羽一夫	
	石川睦男	
	酒木　保	（学生課）

研　究　室　紹　介

■　眼科学講座　■　　広川　博之

昭和50年の当教室開設時から、教室の発展にご尽力された保坂明郎教授が本年３月をもって退官されました。開講時には教授と助教授だけのスタッフも、現在では関連病院に出向中の者も含め38名となっています。保坂前教授は17年間、医局員に対する基本的な教育方針として「臨床に強い眼科医の育成」を掲げ、その結果、今日多くの医局員が全道各地の関連病院で眼科部長あるいは医長として活躍するに至っています。

附属病院では重症な網膜剝離や糖尿病網膜症などが多く、白内障や麦粒腫など一般的な眼の疾患が少ないといった特徴がみられます。したがって、附属病院だけの研修で臨床に強い眼科医となるには不十分で、研修医には医局員が医長の関連病院で短期間勉強してもらっています。また、眼科で一応一人前と認められるためには、白内障の手術ができなければなりません。当教室では卒後２年目にその手術ができるよう教育していますが、他大学に比べると早い方であると思われます。重症な網膜剝離や糖尿病網膜症はほんの10年程前まではほとんど治らないとされていた疾患ですが、これらに対しても当教室では積極的に手術をしています。手術成績は海外の専門施設と比較しても遜色のないものとなってきています。

研究は屈折異常、網膜硝子体疾患、水晶体代謝が中心です。屈折異常については保坂前教授が主に研究していた分野で、現在では吉田助教授が中心となり、特に日本人に多い近視についてその発生の本態を追求しています。今までの研究成果は海外でも高い評価を得ており、今後の発展が期待されています。網膜硝子体疾患については網脈絡膜血管のバリヤー機構、それら血管の循環状態、そして硝子体の形態的変化などの観点から研究をしています。バリヤー機構の研究では吉田助教授らが開発した装置を用い、網膜血管病変発現にバリヤーの破壊がどのように関与しているか検討しています。循環状態の面では吉田助教授、田川講師、小笠原助手らが、点眼薬や眼科手術による影響について研究を進めています。広川講師、秋葉助手らは網脈絡膜疾患の発症と予後に与える硝子体の形態変化について研究しています。吉田助教授、五十嵐助手らは小動物眼の白内障発生過程でリン酸代謝を解析し、白内障の成因解明を試みています。いずれの研究も眼疾患の診断や治療技術の向上に直結しており、国の内外から注目されています。

米国では眼科医になるのが非常に難しく、よほど優秀な医学生でないと採用されません。日本でも関東、関西では難しくなってきています。しかし、北海道はまだ眼科医が不足しており、ひとりでも多くの卒業生が当教室で我々と一緒に仕事することを願っています。

（眼科学講座　講師）

研　究　室　紹　介

■　哲　学　■　　岡田　雅勝

一人しかいない研究室。本棚に縦、横につまれ、机のうえや棚のうえに本が溢れるように散在している研究室。机のうえの、たった一つのパソコンが本に囲まれるようにおかれ、いつも〈うううう〉と重い引きずるような音をたてている。この研究室の主はすっかり文字を書くことは忘れてしまっている。文字は、手で書くのではなく、キイーを押すことによって現れてくるものだとしか思っていない。かつてペンだこを指につくり、腕が動けなくなるほど書き捲くったのに、今は原稿用紙もノートも開けることもない。

この研究室の主は朝、早起きを好む、歳のせいだ。朝食前に研究室に入り、ときには日の出よりも早く起き、パソコンに向かう。パソコンが自分の分身であり、パソコンに映じる自分の姿をみつめながら、その容姿がどうしたら変わるのか、と自己変身を憧憬しながら毎日を送る。しかしこの部屋の主は、カフカの『変身』の主人公グレゴールのように、ある日突然に変身することはない。哲学という学問の性格からして、それが求めるものは、〈変わらないもの〉〈少しばかり改まった言い方をすれば、普遍的なもの〉にあるし、また、この部屋の主がまだ真理を会得することから程遠く、ただたんに真理を憧憬しているにすぎない。

真理を憧憬しながら、真理を把握もできず、悪戦苦闘している。その姿は風車に向かうドン・キホーテさながらである。事柄の真相を明らかにし、人生の実相を明らかにしようと、時には瞑想に耽るが、ともすれば先哲がこれまで言い伝えたことに関心が向かいがちで、時や所の隔たりにあって、人々の心を捉えてきたもの、人々が嫌がおうでも〈そうなのだ〉と言わざるを得なかったもの、いわゆる生の知恵とでもいうものに魅せられてしまいがちである。

ところで、もっと具体的にと、この研究室でなされていることを尋ねられたら、一瞬ためらいを感じてしまう。敢えて言えば、〈汝自身を知れ〉とか〈無知の知〉とか、〈語り得ないことについて、沈黙しなければならない〉という言葉の重みを引き受けて、哲学の研究に没入しているとでも言おうか。そしてもう一つに、人々や学生たちとの交流や対話をできるだけ多く持ちたいと読書会とか、談話会など定期的に実施し、他に国内外にバイオエシックスについての研究交流に携わっているとでも。

（哲学講座　教授）

平成４年度入学式

平成４年度入学式が、４月10日（金）10時から本学体育館において挙行された。

式では、新入生 100名（うち女子24名）を代表して青木康高君が宣誓。ついで、学長式辞があり、新入生は医学生としての自覚をあらたに大学生活の一歩を踏み出した。

（学生課）

平成４年度大学院入学者名簿

学生氏名	専攻	研究指導教官
堀川道晴	細胞・器官系	石川睦男
片山英人	〃	〃
眞岸克明	〃	久保良彦
杉村敏秀	〃	米増祐吉
上口権二郎	生体情報調節系	並木正義
千葉篤	〃	〃
木村圭介	〃	〃
片田彰博	〃	海野徳二
牧野雄一	〃	牧野勲
斉藤美恵子	〃	〃
近藤亜津子	〃	〃
須貝理香	〃	奥野晃正
松本英樹	〃	小川秀道
寺尾基	〃	〃
碓井正	〃	〃
秋葉真理子	生体防御機構系	東匡伸
姜波健	生体情報調節系	水戸廸郎
談勇	〃	小川秀道

平成３年度学士学位記授与式

平成３年度学士学位記授与式が、３月25日（水）10時30分から本学体育館で挙行された。

式では、室内合奏団が奏でる調べのなか、学長より卒業生 113名（うち女子27名）一人ひとりに学士学位記が手渡された。

ついで学長から卒業にあたり式辞が述べられた。

（学生課）

平成３年度学位記受領者名簿

氏名	課程・論文の別	学位記授与年月日
船越洋	課程博士	平成３年６月28日
田中肇	課程博士	平成３年６月28日
三田村亮	課程博士	平成３年６月28日
由良茂貴	論文博士	平成３年６月28日
神山昭男	論文博士	平成３年６月28日
田中秀一	論文博士	平成３年６月28日
筒井眞人	論文博士	平成３年６月28日
中村晃	論文博士	平成３年６月28日
平井修二	課程博士	平成３年９月30日
水上明保	課程博士	平成３年９月30日
宮野修	課程博士	平成３年９月30日
大宮博士	論文博士	平成３年９月30日
堀尾昌司	論文博士	平成３年９月30日
佐古和廣	論文博士	平成３年９月30日
松橋浩伸	論文博士	平成３年12月25日
葛西眞一	論文博士	平成３年12月25日
野津司	課程博士	平成４年３月25日
吉江浩光	課程博士	平成４年３月25日
今井政人	課程博士	平成４年３月25日
野坂拓寿	課程博士	平成４年３月25日
石澤貢	課程博士	平成４年３月25日
池田和代	課程博士	平成４年３月25日
高野勝信	課程博士	平成４年３月25日
小野朋子	課程博士	平成４年３月25日
阿部昌彦	論文博士	平成４年３月25日
小原敦史	論文博士	平成４年３月25日
丸山純一	論文博士	平成４年３月25日
橋本政明	論文博士	平成４年３月25日
石田栄	論文博士	平成４年３月25日
川嶋栄司	論文博士	平成４年３月25日
本田肇	論文博士	平成４年３月25日
寺澤憲一	論文博士	平成４年３月25日
平博彦	論文博士	平成４年３月25日
大見広規	論文博士	平成４年３月25日
秋葉純	論文博士	平成４年３月25日
五十嵐弘昌	論文博士	平成４年３月25日
小笠原博宣	論文博士	平成４年３月25日
古川英樹	論文博士	平成４年３月25日
鈴木望	論文博士	平成４年３月25日
岩原敏人	論文博士	平成４年３月25日

第１回新入生研修実施される

平成４年度新入生研修（第１回目）が４月20日（月）・21日（火）の両日開催された。

第１日目はＡ組、第２日目はＢ組を対象に実施された。研修は新入生を12～13名のグループに分け、１グループに一般教育の教官１名と基礎又は臨床の教官１名の計２名があたり、自己紹介についで修学上の問題あるいは学生生活全般にわたり指導助言並びに懇談が行われた。

（学生課）

医大祭開催について

今年の医大祭は例年より約10日間早い６月５～７日となりました。そのおかげで今の時期からかなり慌ただしくなってきております。

さて、今年の医大祭の見所といえば何と言っても近年実現していなかったコンサートでしょう、これは山下洋輔氏(p)と渡辺香津美氏(g)によるジャズコンサートで、まず見て損しないこと間違いなし！　またその他にも元日本テレビニュースキャスターの「あ、さて～」小林完吾氏の講演会や昨年大好評だったダンスパーティーなど盛り沢山です。

これらのイベントは実行委員会が主催しているわけですが、その主旨はもっと学外の人々が気楽に参加できて医大との交流を深められるようにすることにあります。従って皆さんも積極的に参加して下さることを願ってやみません。

また、医学部ならではの出し物である医学展も今回は多くの参加が見込まれており、近年下火だった医学祭の復活の兆しも見えてきています。各クラブ・サークル等による模擬店も例年通りの予定で賑やかさには事欠かないことと思われます。

最後に、今年の学祭のテーマは「一刻千金」です。とにかく３日間の期間を存分に楽しみましょう。

（大学祭実行委員会）

課　外　活　動　短　信

第34回東医体スキー部門総合優勝！
東医体夏季・冬季総合準優勝

平成４年３月20日～25日長野県戸狩スキー場にて行われ、４年ぶりに優勝旗を旭川に持ち帰りました。各競技の結果は以下の通りです。

〈男　子〉　総合　　優勝

☆スーパー大回転

２位　斉藤　　学（3学年）

３位　讃井　将満（6学年）

４位　安部　裕介（6学年）

６位　加藤　祐司（6学年）

☆大回転

２位　竹田　眞純（5学年）

４位　水上　裕輔（6学年）

５位　安部　裕介（6学年）

☆回　転

２位　加藤　祐司（6学年）

３位　水上　裕輔（6学年）

☆15kmXC

５位　福永　亮朗（3学年）

☆8kmXC

４位　鹿野　　恒（6学年）

６位　福永　亮朗（3学年）

☆XCリレー

３位　星　野、　鹿　野、　福　永、　有　倉

〈女　子〉　総合　　優勝

☆大回転

６位　山下　智子（6学年）

☆回　転

３位　飛世　　桂（4学年）

☆5kmXC

１位　由良　智春（3学年）

２位　黒木　文子（5学年）

☆3kmXC

１位　由良　智春（3学年）

３位　黒木　文子（5学年）

３位　辻　由紀子（5学年）

６位　蒲池由美子（6学年）

４位　辻　由紀子（5学年）

６位　蒲池由美子（6学年）

アイスホッケー部
旭川社会人リーグ優勝！

☆旭川社会人リーグ	１部	医大Ａチーム	優　勝
	３部	医大Ｂチーム	５　位
個人賞	ＭＶＰ、アシスト王		千里直之
	best６、Ｄ　Ｆ		斉藤裕樹
☆旭川市長杯		医大Ａチーム	準優勝
☆理事長杯		医大Ｂチーム	優　勝

土曜日の業務について

法律改正による国家公務員の週休２日制導入に伴い、土曜日の業務は下記のとおりとなります。

記

《学生課》

前期授業期間中は２名の職員が執務を行いますが、各種届出、諸証明書の交付及び物品・施設の借用等、各種手続き等は平日に済ませて下さい。

なお、夏季休業期間中（7/13～8/29）は執務を行いません。

また、後期の取扱いについては別途通知します。

《図書課》

今年度は従来どおり開館し、開館時間及び閲覧カウンターにおいてのサービス内容に変更はありません。

ただし、２名の職員のみですので、サービスに不充分な点もあるかと思いますが、ご了解願います。

（教務部）

地区体について

去る５月９日（土）第２回実行委員会が開催され種目別の実施要項がきまりました。

また、参加大学も決定しましたので今後この実施要項にもとづき、組合わせ表及びタイムテーブルを作成し大会を実施することになります。

今後のスケジュールとして、

５月19日（火）17時30分から講義実習棟第３講義室において地区体関係サークル主将会議を行います。

内容は実施要項の説明、参加大学の一覧、種目別主将会議の内容、各連盟（協会）との運営方法等について打合せを行う予定です。

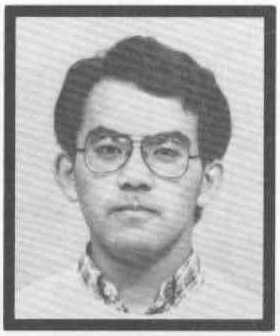
５月23日（土）13時30分から講義実習棟において参加大学の主将を対象にした種目別主将会議を行います。

内容は大会の注意事項の説明、質疑、組合わせ抽選等です。

詳しいことは５月19日の地区体関係サークル主将会議において打合せを行いますので、各関係サークルの主将は参加願います。

（学生課）

訃　報



平成４年３月28日(日)、第５学年学生の守屋真一君（26才）が山岳事故により急逝されました。

守屋君は仲間と春休を利用して大雪山系凌雲岳北尾根を登はん中３月28日午前９時30分頃、稜線からせり出した雪ぴを踏み抜き滑落し、死亡されました。

守屋君は北海道旭川東高等学校を卒業し、希望に燃えて本学に入学、熱心に勉学に励む一方課外活動でも山岳部に所属し、部長をするなど部の中心となり大いに活躍していました。

バイタリティーあふれる学生でしたが、志半ばにして不帰の人となりました。

ここに謹んで守屋君の御冥福をお祈りいたします。

なお、山岳部及び友人達により屋外リハビリテーション施設で、追悼記念植樹が行われました。

（学生課）

教官の異動

（停年退職）

H4.3.31	法医学講座	教授	石橋　宏
H4.3.31	内科学第一講座	教授	小野寺壮吉
H4.3.31	眼科学講座	教授	保坂明郎
H4.3.31	臨床検査医学講座	教授	牧野幹男
H4.3.31	生物学	教授	美甘和哉

（辞　職）

H4.3.31	物理学	助教授	晴山雅寛

（庶務課）

学生の定期健康診断実施について

平成４年度の学生の定期健康診断を、下記のとおり実施するので全員受検すること。

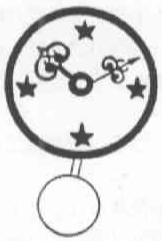
なお、定期健康診断を受検しない者は、「健康診断書」を発行できないので注意すること。

記

日　　時　　５月27日（水）12：30～14：30
（原則として第１・２・５Ａ学年）
５月30日（土）12：30～14：30
（原則として第６学年）
６月３日（水）12：30～14：30
（原則として第３・４・５Ｂ学年）
※　大学院生については、いずれかの都合の良い日に受験すること。

場　　所　　保健管理センター

検査項目　　胸部Ｘ線、身長、体重、視力、検尿、血圧、内科検診



窓外

三代川斉之

山菜と春の季語

旭川にもようやく春の息吹が感じられる季節になった。野山には蕗の薹、楤の芽、片栗、独活、蕨、薇といった山菜が一斉に芽を出し、山菜愛好家（山菜取りを楽しむ人や私のようにそれをお裾分けしてもらい食べるのを楽しみにしている人）にはたまらない季節である。

例えば蕗の薹。日本中至る所の山や野に自生するキク科の多年草である。雪の残る道端などで土を割って顔を出す卵円形の先端を覗かせた花芽を見つけると、人より先に春の息吹を見つけたようで嬉しくなる…と多少風流を味わった後で、花の咲く前に摘み取って食べてしまう。刻んで味噌汁に散らしても香ばしく、味噌付けや天麩羅もほろ苦い風味がまたよい。

楤の芽は、ウコギ科のタラノキ（刺だらけで別名「鳥とまらず」）の幹の先端に出る新芽をいい、茹でてお浸しにしてもよし、味噌和え、胡桃和えにしても美味しいが、なんと言っても天麩羅が最高。大好物の一つである。山菜の王者と云われるのが良く解る。

山菜講座のような内容になってしまったが、実は、これらの山菜の名前は歴とした俳諧の春の季語。蕗の薹は蕪村の句に、楤の芽は一茶の句にも出てくる。

　　蓍とはなれもしらずよ蕗のたう　（蕪村）

　　たらの芽のとげだらけでも喰われけり　（一茶）

片栗はそれだけでは季語にはならず、片栗の花となってはじめて春の季語になる。ユリ科の多年草で20センチほどの茎の先に紅紫色の釣鐘状の花が下向きに一つ咲く。花も可憐で美しいが、若葉を和え物や浸し物にし食すのもまたよし。歌では大伴家持が万葉集の中で、

　　もののふの八十をとめ等が汲みまがふ
　　寺井の上の堅香子の花

と詠っているが、堅香子の花とはこの片栗の花の事。

山菜の事ばかりで喰いしんぼうまるだしであるが、季語とは本来季節を感じさせるもの、おのずと動植物、食べ物に関連した物が多くなるものである。代表的な晩春の季語には、桜・躑躅・藤・ライラック等の花、蝶・虻・蛍などの虫、鰊・鱒・若鮎等の魚と貝類全般（北寄貝も含まれる）などがある。その他、時候、生活、行事から生まれた季語も沢山あるが、春が付けばほとんど春の季語と云って良い。中でも、春の夢　春愁などは私の好きな言葉である。

他愛も無い文章を書いてしまったが、最後に好きな句を一つ。

　　とぶ鶉鼠の昔忘るるな　（一茶）

麗らかな春の季節に誘われて飛び回っている愛嬌のある鶉を見て、鼠に羽の生えたような格好の鶉を揶揄して詠ったのかと思いきや、然にあらず。流石は一茶…。元々は、中国の『呂氏春秋』という書の中にみられる『田鼠化して鴽となる』という中国古代の天文学による七十二候の一つで、時候の事。二十四節気（春分、夏至、秋分、冬至などはこの中に入る）でいう清明の第二候、太陽歴でいえば４月10日から14日頃に当たる時候の名を捩った句なのである。この頃に土竜（田鼠）が鶉になると云う非科学的な説は首を捻らざるを得ないが、この季節にいかにも動物たちの活気が漲ってくる様子が幻想的に現されていて面白い。さらに、一茶の句には初心忘るるべからず的な揶揄も込められているようで私には忘れ難い句になっている。

さてさて、一茶や芭蕉のようにのんびりと春の夢を見ながら春愁に浸れるような一人旅でもしてみたい。

（病理学第二講座　講師）